

男女の役割：日米大学生の認識調査

マシュー・サンダース

カルフォルニア州立大学モントレイ校

要旨

社会では男女には違う役割があるとされている。日本は男性指向の社会で女性は仕事よりも家にいるべきだという認識が強い。アメリカの歴史においても同じような認識があった。しかし、近年アメリカでも日本でもより男女平等な社会になってきている。この研究では男女の役割を人々はどのように考えているのか、その認識はメディア、家族からどのように影響され、形成されているのかを調べた。アメリカと日本の大学生を対象に行ったアンケート調査の結果、どちら国でも男女にかかわらず公平に家事や子育てをするべきだという意見が多いことが分かり、文献調査の結果と同じような結果が出た。また、両国の学生は女性も大学教育を受けるべきだという認識が強いことが分かった。

1. 研究の重要性

日本留学の間に気がついた社会的な差の一つが、男女の役割であった。日本は、はっきりとした男女の役割があるようである。それに対し自分の男女の役割に対する考え方、また、アメリカにおける男女の役割は日本に比べるとあいまいであると感じた。私はこの研究によって日本人とアメリカ人が男女の役割をどのように捉えているのかを明らかにする。

2. 研究質問

1. アメリカと日本では男女の役割をどのように認識しているか。またどのようにその役割について考えているのか。
2. 男女の役割の認識はメディアや家族からどのように影響され、また形成されるのか。

3. 研究背景

ここでは、日本とアメリカの男女の役割についての認識の変化、短期大学や大学への進学率、日本の女性教育、男女の役割に対する影響力を調べてみた。

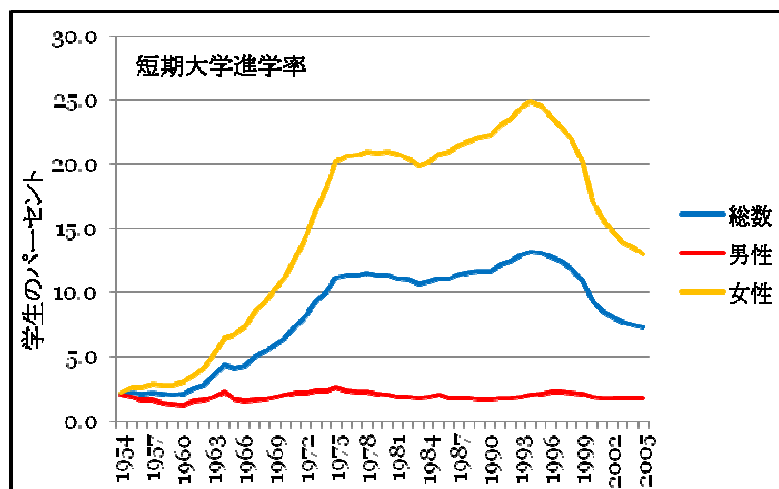
3.1 日本の以前の男女の役割認識

明治維新前は女性は教育を受けることができず男性のみが教育を受けることができた。明治維新後は公共教育の共学化が始まり、私立女学校が開校されたため女性も教育を受けることが可能になった。しかし、教育内容は良妻賢母を育てる教育であった。つまり、お茶、お花、家事などである(Hendry, 2003)。

第二次世界大戦後アメリカ軍占領時には1946年に公布された教育基本法によって男女共学教育や教育の平等が実施された。また、1947年に公布された新しい憲法によって雇用の機会均等、婦人の参政権、さらに法の下での男女平等などが定められた(Hendry, 2003)。

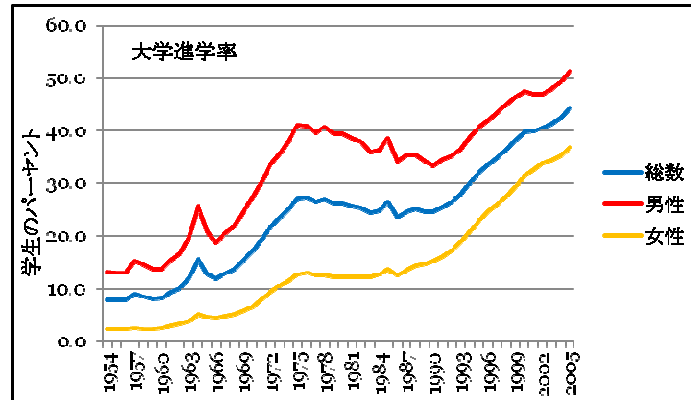
3.2 短期大学や大学への進学率

図1：1995年-2005年の短期大学進学率



1954年の短期大学への進学率は3%であったが、ピーク時の1995年ごろには進学者の25%を占めた。ところが2005年には13%となり、1995年以降は減少の一途をたどっている(図1参照)(Statistics Bureau, 2006)。日本では短期大学のほとんどは女性のための学校であり、良妻賢母になる教育を行った。

図 2 : 1995 年-2005 年の大学進学率



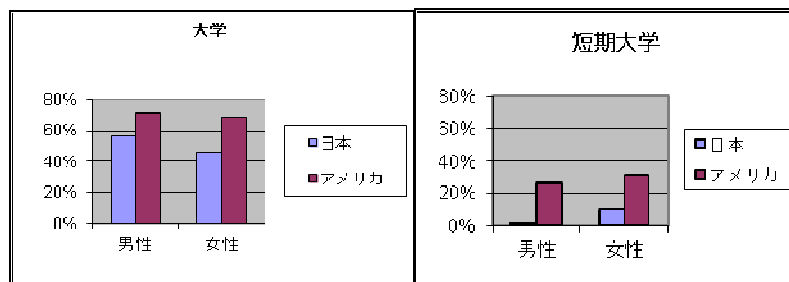
次に四年制大学への進学率について説明する。1954年には女性の進学率は5%で男性は13%だったが、2005年には女性の進学率は37%、男性は51%になり増加傾向にある(図2参照)(Statistics Bureau, 2006)。社会で男女平等化が進む中女性もよりよい仕事を得るために短期大学ではなく大学への進学を希望し始めた。

3.3 日本の女性教育

1965年ごろまで「良妻賢母」が女性教育の中心であった。主な目的は夫を助け、子供を教育し、日常の家事を旨くこなす女性を作ることであった(Hendry, 2003)。社会では教育レベルに関わりなく女性の終身雇用は望まれなかった。一般事務や秘書などの仕事をして、寿退社をすることが好まれた。現在もなお女性への待遇は厳しいが、社会は男女平等をより推進する傾向にある(北村, 2008)。

3.4 日本とアメリカの現在の短期大学と大学の進学率

図 3 : 短期大学と大学の進学率



短期大学進学率は日本よりアメリカのほうが高く、進学者の数は男女間で特に大きな差は見られない。その理由は短期大学から大学への編入が容易だからである。一方、日本の短期大学の進学者はほとんど女性で短期大学から大学への編入は難しい。大学の進学率については男女間で異なるが、その違いについてはアメリカと日本は類似している(図3参照)(U.S. Census Bureau 2012, Statistics Bureau Ministry of Internal Affairs and Communication 2003)。

3.5 日本の家事の推移

図4：日本の家事の推移

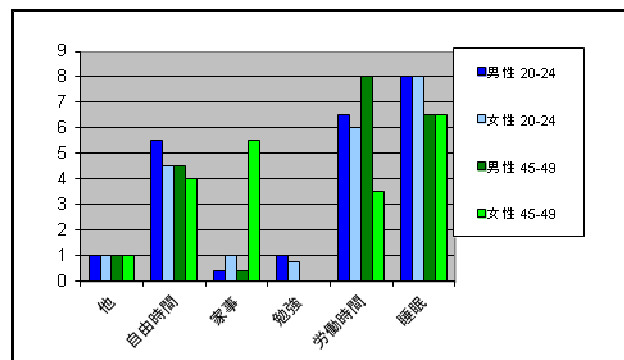


図4からもわかるように20歳から24歳までについては男女間で家事労働時間に差がない。しかし、45歳から49歳までの男女については家事労働時間差が大きい。これは伝統的な仕事の役割、即ち男性は外で働き、女性は家事労働をするという分担認識にしたがっているのかもしれない(図4参照)(Statistics Bureau, Ministry of Internal Affairs and Communication, 2003)。

3.6 日本の従業員の推移

2012年の調査によると、正規雇用とアルバイトについて20歳から24歳までの男女差はないが、45歳から49歳まででは明らかに男女差がある。45歳から49歳までの女性は家庭の中心であるため正規雇用ではなくアルバイトで仕事をする傾向にある(Takamura 2001, Statistics Bureau, Ministry of Internal Affairs and Communication 2003)。

3.7 アメリカの家事や従業員の推移

1965年から2011年までの間に男女の役割は大きく変化した。このおよそ50年の間に女性は家庭から社会へと進出し、男性は家事に関わり始めたようである。しかし、現在でもまだ女性は家庭、男性は職場、という傾向が続いているようだ(Parker, 2013)。

3.8 男女の役割に対する影響力

子供は両親の役割を見て育つために、家庭が男女の役割に対する概念の基本となる(Hendry, 2003)。おもちゃについても、アクションフィギュアは男の子に、人形は女の子にといった男女の区別、家事についても女の子は母親の手伝い、男の子は大工仕事など父親の手伝いをするとといった区別が男女の役割に対する概念の形成に影響を及ぼす(Lindsey, 2010)。

メディアについてはアメリカでは子供向け番組の中で主役は男である(Smith, 2000)。その上、メディアでは男女の一般的に認識されている役割を伝えている(Lindsey, 2010)。日本ではホームドラマの中で男性や女性が一般的にそうあるべきとされる振る舞いをし、一般的に理想とされる家族形態を表す。テレビの宣伝も両国での男女の役割を描写する。女性は家事や子育てをし、男性は仕事やスポーツをする(Valaskivi, 2000)。

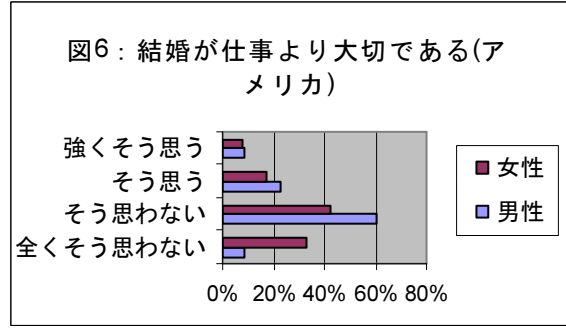
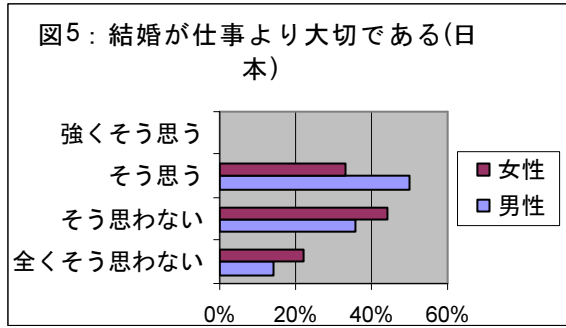
4. 研究

日本人は32名、アメリカ人は34名、合計66名の大学生がオンラインで行ったアンケート調査に答えてくれた。女性はアメリカ人が12名、日本人が18名、男性はアメリカ人が22名、日本人が14名である。

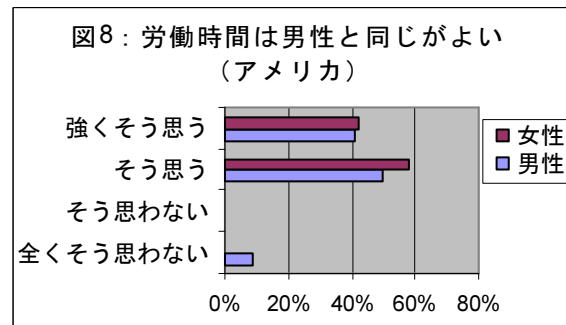
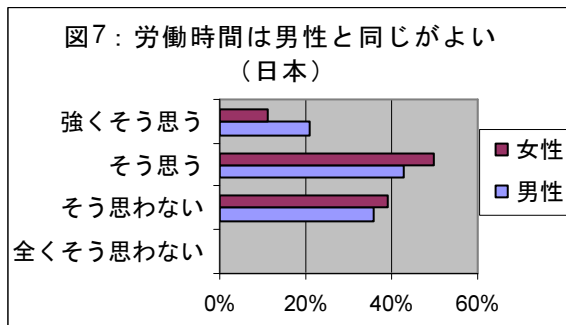
5. 調査結果と分析

5.1 研究質問1

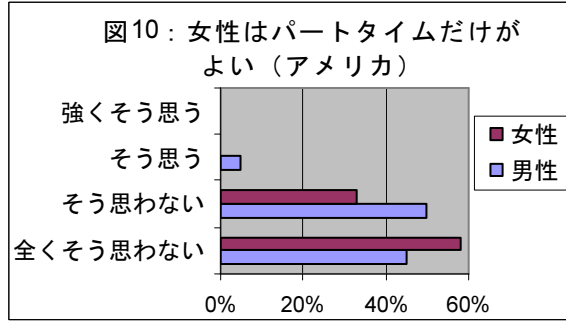
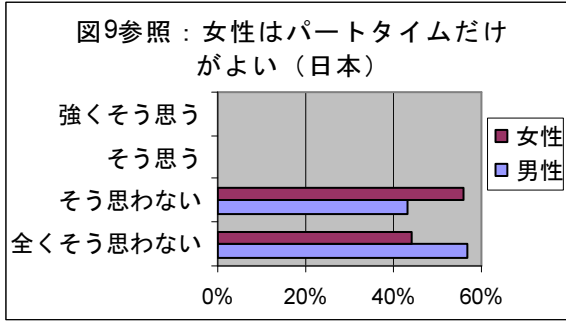
研究質問1の「アメリカと日本では男女の役割をどのように認識しているか。またどのようにその役割について考えているのか。」についての結果を説明する。



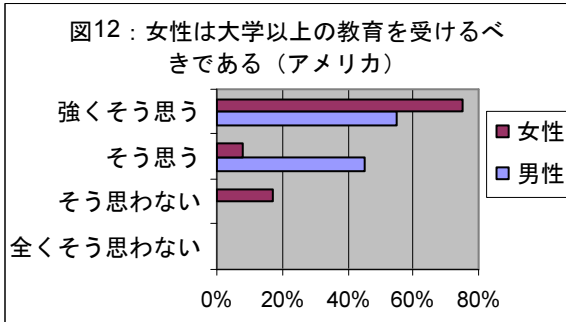
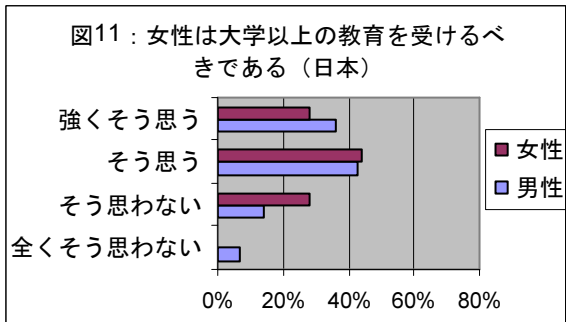
まず、「女性の役割」についてのアンケート結果を説明する。「女性として結婚は仕事よりも大切である」という意見に対して、日本人の男性は賛成するが、女性は反対する傾向にある(図5参照)。男性は伝統的な価値を重んじるが、女性はその考え方に反対し、就職することを望んでいる。「女性として結婚は仕事よりも大切である」という考え方に関してはアメリカでは男性も女性も反対する傾向にある(図6参照)。



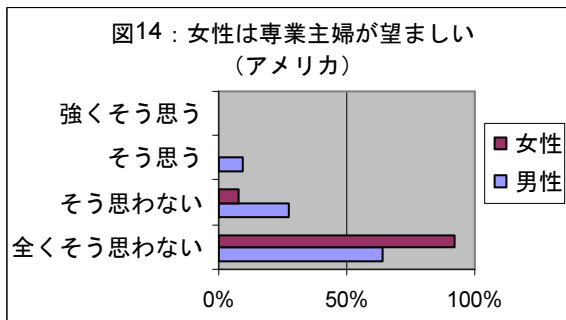
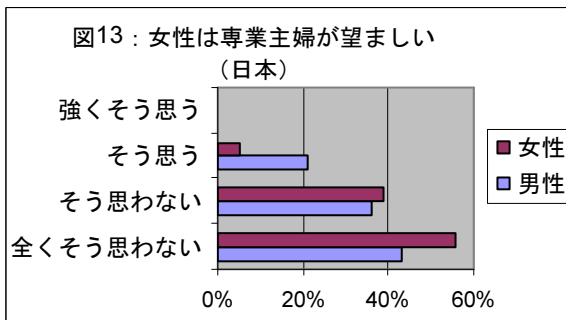
労働時間については、日本では「男性と同じ労働時間にするべきである」という意見に賛成する女性も男性も多いが、反対する女性も男性もかなりいる(図7参照)。また、日本では女性と男性は何れも、女性は家庭に、男性は仕事にという考えを持っている。アメリカでは「男性と同じ労働時間にするべきである」という意見に対し男性も女性もほぼ100%賛成する(図8参照)。



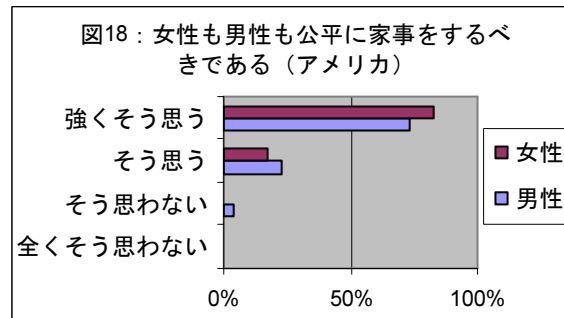
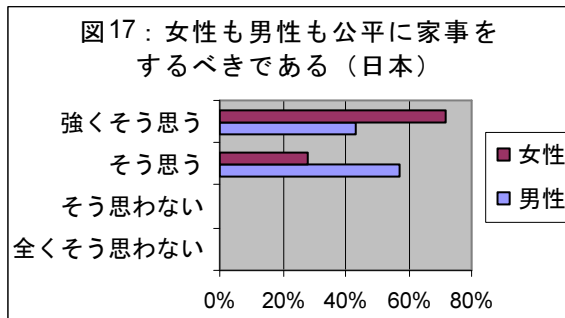
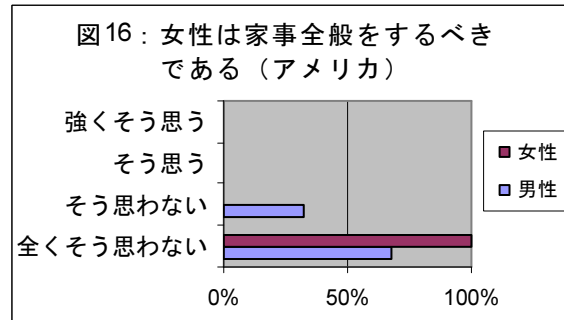
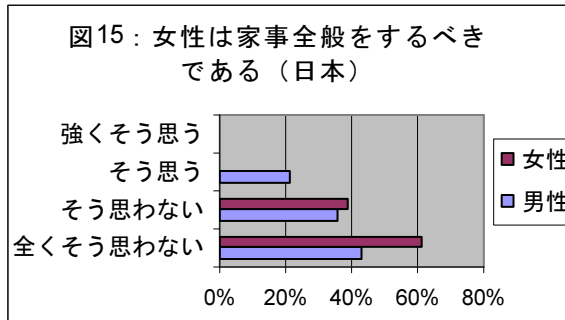
「女性はパートタイムだけすればいい」という意見に対しては、日本では回答者全員が反対した(図9参照)。先の「男性と同じ労働時間にするべきである」という意見には反対した人も、女性はパートタイムだけすればいいという意見には反対している(図10参照)。この意見にアメリカではほぼ100%が反対した。職場において男女の平等を求める傾向が続いている。



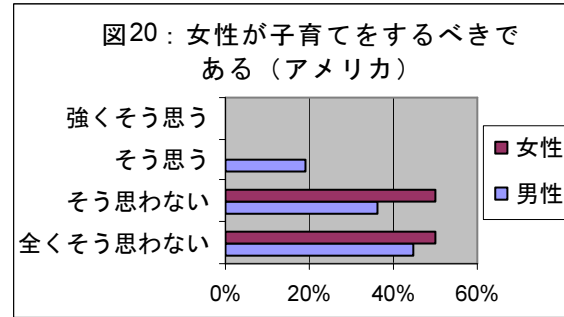
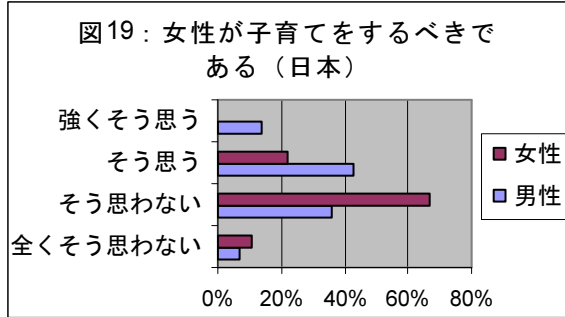
高等教育について、日本でもアメリカでも「女性は大学以上の教育を受けるべきである」という意見に多くの男性も女性も賛成する(図11、図12参照)。日本でもアメリカでも男女共に女性高等教育は必要であると考える人が多い。



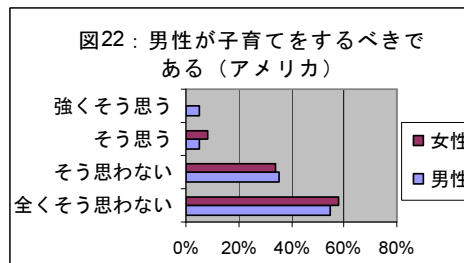
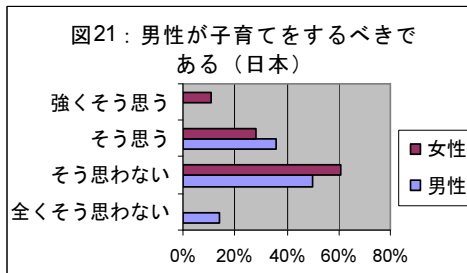
専業主婦については、日本人もアメリカ人もほとんどの男女が「女性は専業主婦が望ましい」という意見には反対しており、女性の高等教育、社会進出の傾向は続いている(図 13、図 14 参照)。しかし、日本では図 13 に見られるように 21%の男性が賛成している。このことは日本では今日でもまだ伝統的な考え方が根強く残っているといえるかもしれない。一方、アメリカではこの考え方に賛成する男性はほとんどいなかった(図 14 参照)。



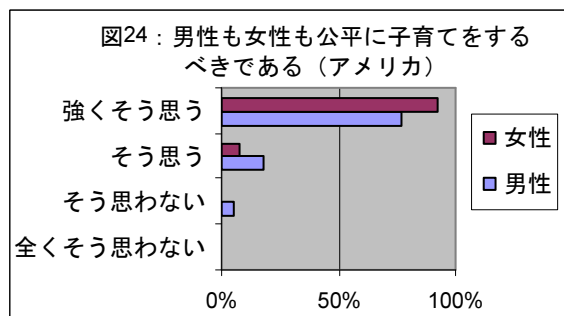
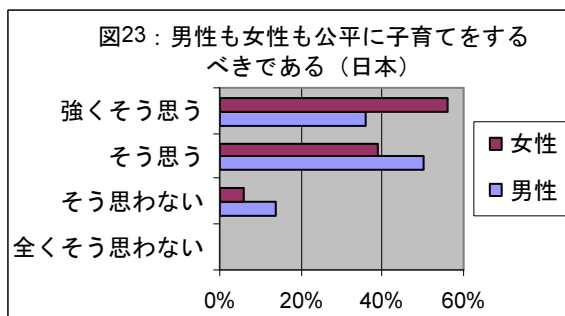
家事については、日本では多くの男女が「女性は家事全般をするべきである」という意見には反対であった。(図 15、図 16 参照)しかし、賛成する男性も 21%いて伝統的な考え方の根深さを示しているかもしれない。一方、アメリカでは 100%の男女がこの意見に反対であった(図 18 参照)。「家事は公平にするべきである」という意見にアメリカでも日本でも男女共に賛成した(図 17、図 18 参照)。



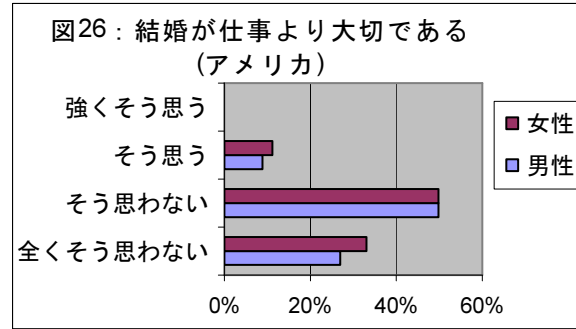
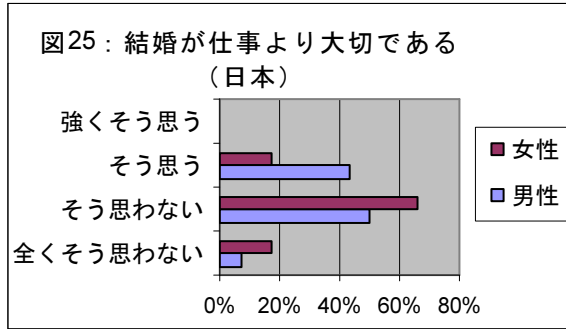
子育てについては、日本では「女性が子育てをするべきである」という伝統的な意見にほとんどの女性が反対している一方、ほとんどの男性は賛成している(図19参照)。アメリカではほとんどの男性と100%の女性がこの意見に反対している(図20参照)。しかしながら、アメリカでも約20%の男性はこの意見に賛成で、伝統的な考え方を持つ人もいるようだ。



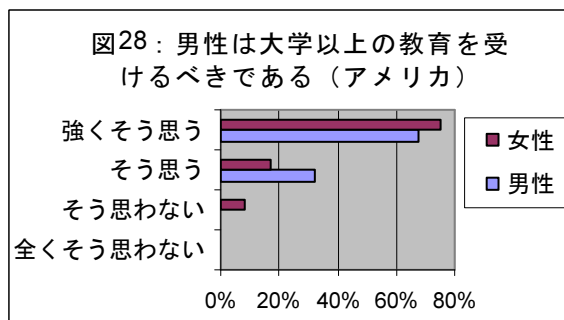
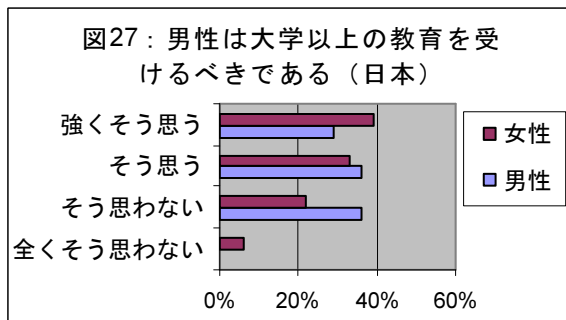
男性の役割については、日本は「男性が子育てをするべきである」という意見にはおおくの男性も女性も反対する中この意見に賛成する人も30%近くいた(図21参照)。男性の役割が職場から家事へという変化を表わしているのかもしれない。アメリカはこの意見にほとんどの男女が反対した(図22参照)。男性=子育てをする人、という考え方はまだないようだ。



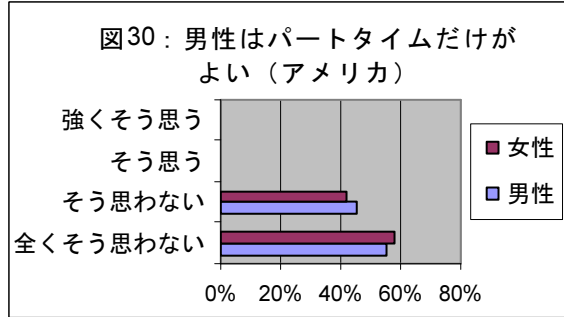
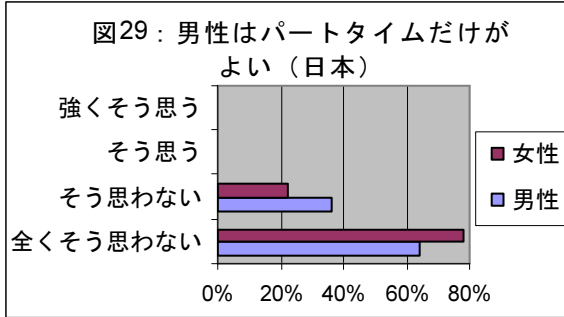
次に、子育てにおける男女の役割について述べたいと思う。日本もアメリカも「男性も女性も公平に子育てをするべきである」という意見に男女共賛成している(図 23, 24 参照)。女性が高等教育を受けたり就職することを望むことと相まって、男性の子育ての役割がより多く望まれようになっている。



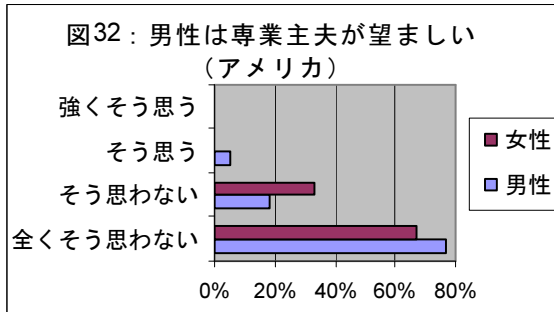
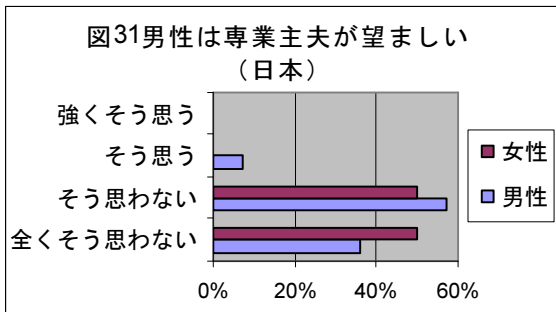
結婚については日本では「男性にとって結婚は仕事よりも大切である」という意見に対して、ほぼ 100%の女性と約 60%の男性が反対する(図 25 参照)。しかし、男性の 40%強が賛成しており、男性の役割が職場から家事へという変化を表しているのかもしれない。アメリカではほとんどの男性も女性もこの意見に反対する(図 26 参照)。アメリカでは男性にとって結婚が最優先ではない。



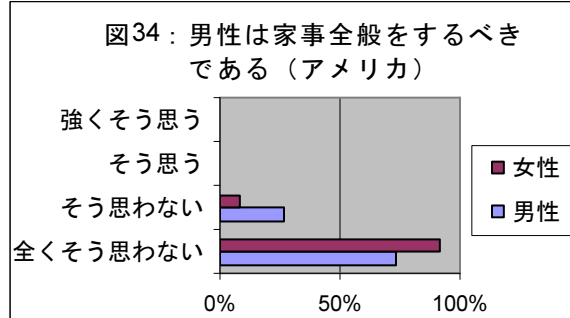
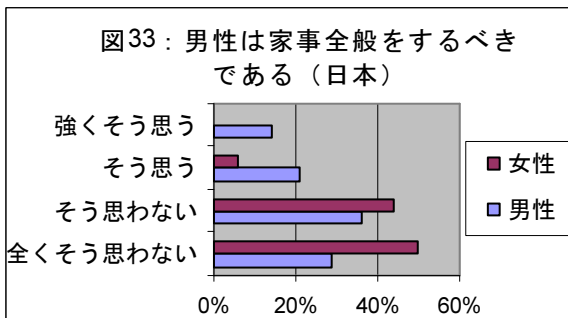
高等教育については、日本では「男性は大学以上の教育を受けるべきである」という意見に賛成する男性も女性も多いが、反対する男性も女性も僅かだがいる(図 27 参照)。男性にとって大学以上の教育は大切であるが、必ずしも必要ではないかもしれない。アメリカではほとんどの男性も女性もこの意見に賛成する(図 28 参照)。男性にとって大学以上の高等教育は必要である。



日本でもアメリカでも「男性はパートタイムだけがよい」という意見に男性も女性も反対する。それは男性が一家を支えるという考えを反映している(図29、図30参照)。

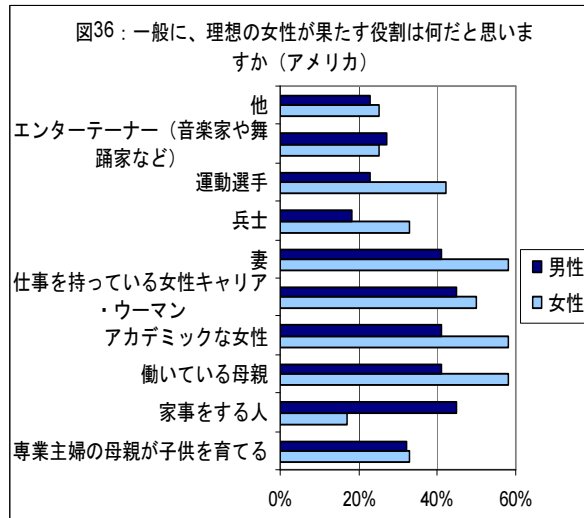
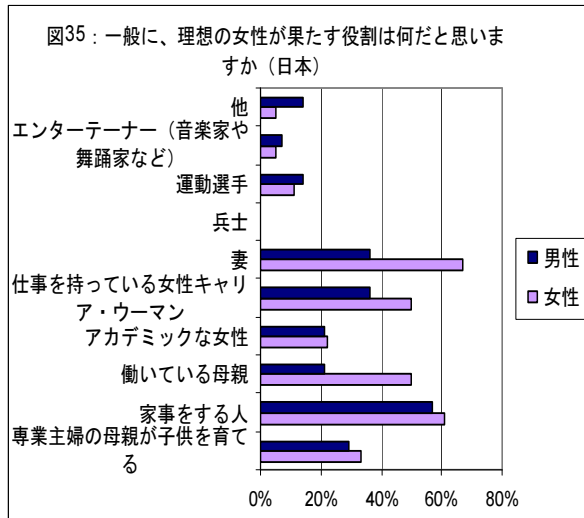


ほぼ100%の回答者が「男性は専業主夫が望ましい」という意見に反対する。男性が家事専業という考えはまだないようだ(図31、32参照)。

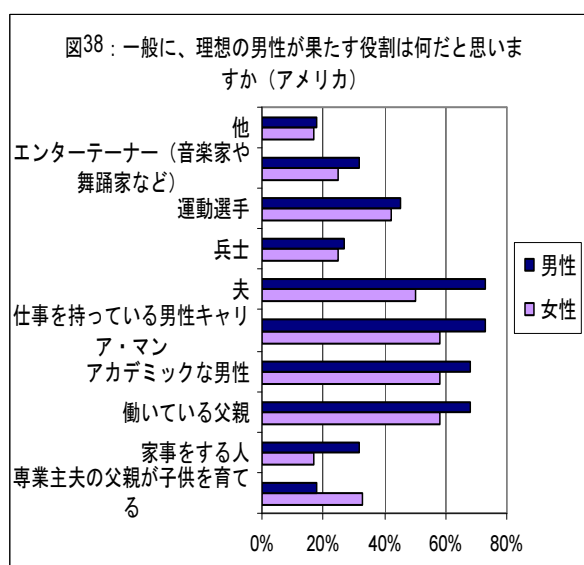
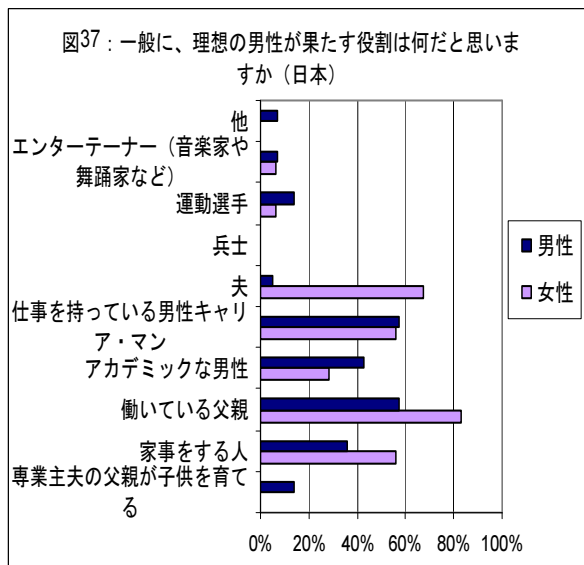


日本では「男性は家事全般をするべきである」という意見に男性も女性も反対する(図33参照)。女性は男性が家事を専業にするという考えにはまだ馴染まない。しかし、この意見に賛成する男性も20%強いる。男性の中には家事労働に対して肯定的に捉

える人が現れ始めているのかもしれない。アメリカではこの意見に男女共回答者の全員が反対する(図 34 参照)。家事労働は男性の第一の仕事だとは考えていない。



次に女性の理想的役割について質問した。日本人は主婦、キャリア・ウーマン、働いている母親、家事をする人、専業主婦の母親と答えた(図 35 参照)。答えには家事や子育てという伝統的な役割と働く女性という現代的な役割の両方が混在していた。主婦から職業婦人という女性の役割に対する価値観推移を表しているとも言える。ほとんどのアメリカ人は全ての項目が理想的な役割と答えた(図 36 参照)。女性は男性と平等であるし自分が望むものは何できるという信念を反映している。



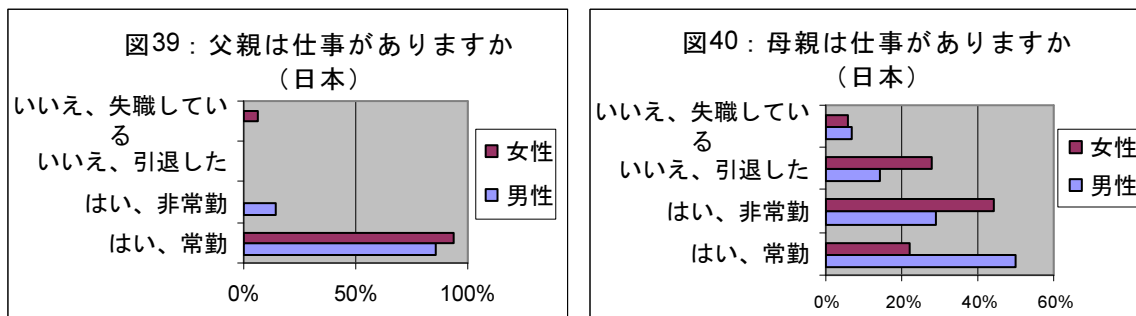
男性の理想的役割について質問した。日本の男性は高学歴のキャリア・マンと働いている父親と答えた(図 37 参照)。女性は夫、家事をする人、働いている父親と答えた。即ち、女性は男性が結婚するべきだし家事を積極的にするべきだと思っている。この質問に対してアメリカ人の男性はキャリア・マン、働いている父親、家事をする人と答えた(図 39 参照)。仕事は大切だが、もっと大切なことは家庭での父親あるいは夫としての役割においている。

5.2 研究質問 1 の結果のまとめ

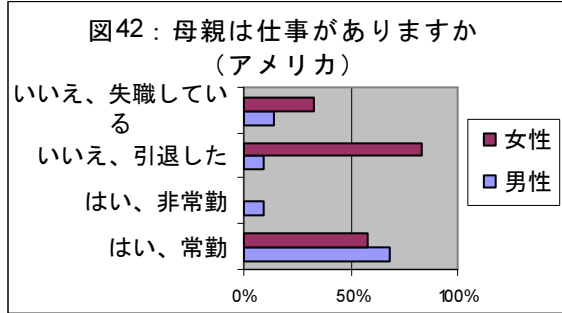
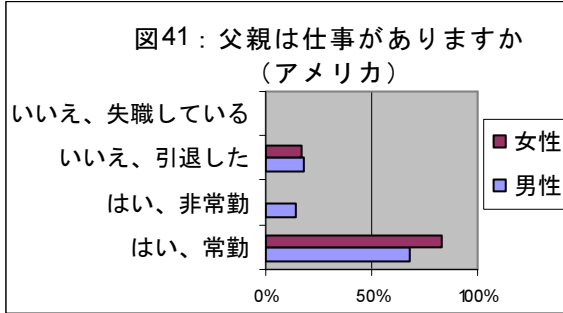
日本では女性が家事をして、男性は職場へ働きに行くという伝統的な役割がまだ続いているが、男性は職場から家庭へ、女性は家庭から職場へという新しい考えも生まれている。全体的に男女平等に向けた変化が見られるのかもしれない。一方、アメリカでは男女平等を強く期待している。女性は働きながら同時に母親であること、男性は働きながら同時に父親であること、即ち、家事や子育てを公平に行うことが期待されている。

5.3 質問 2

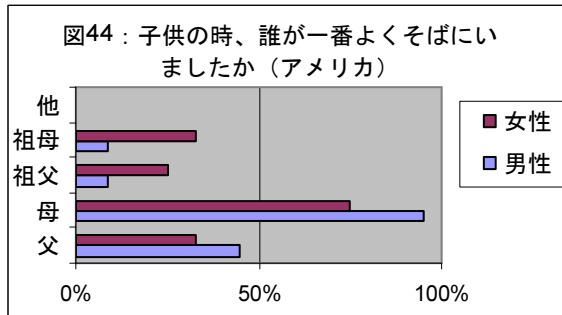
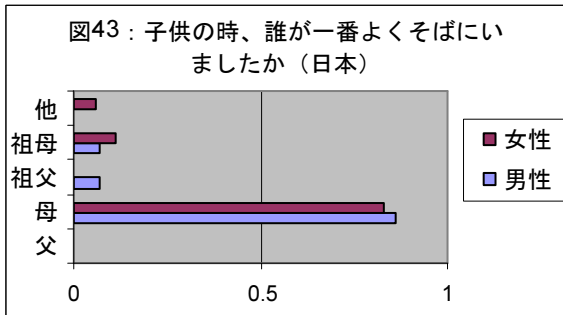
研究質問 2 の「男女の役割の認識はメディアや家族からどのように影響され、また形成されるのか。」についての結果を説明する。



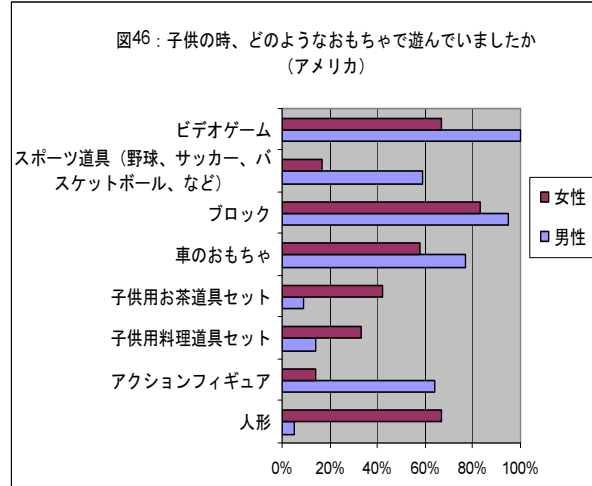
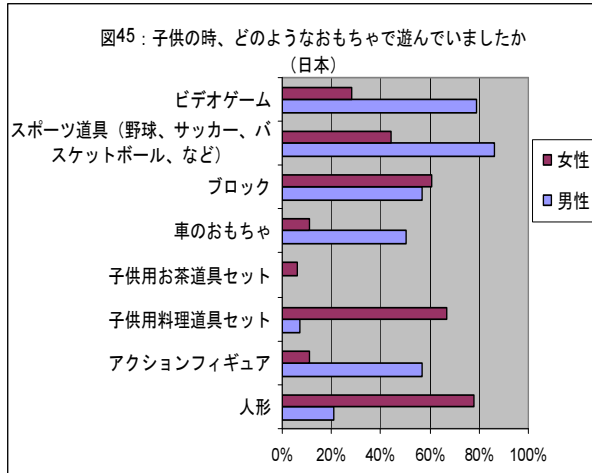
まず、両親の仕事について質問した。日本ではほとんどの父親は正規雇用の仕事があり、母親は仕事をしてるが多くが非常勤で正規雇用の人は半分以下であった(図 39, 40 参照)。男性は職場で女性は家庭にというイメージを反映している。



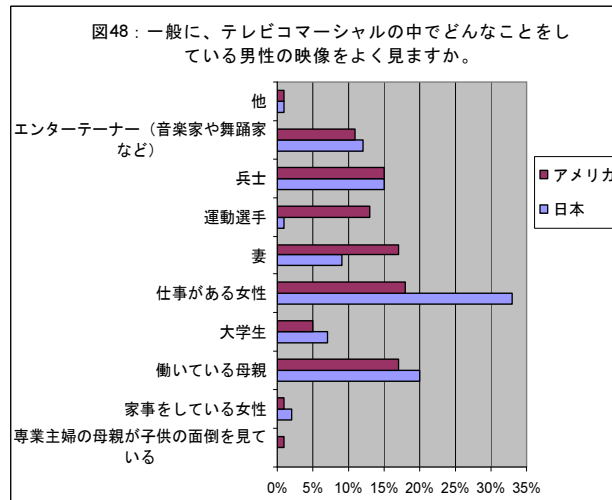
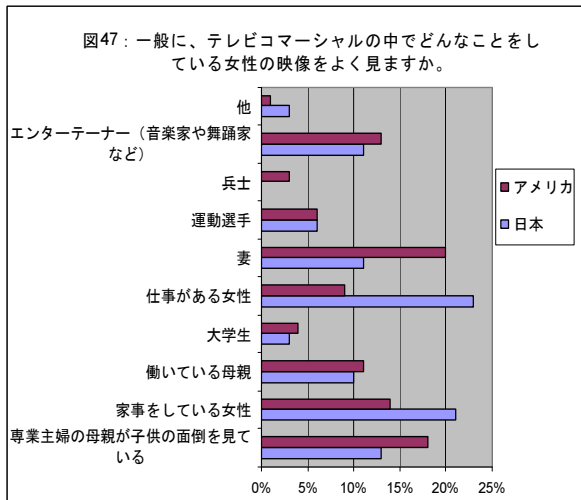
アメリカでは父親も母親も同様に正規雇用者である。しかし、働いている母親より働いていない母親のほうが多い(図 41, 42 参照)。



「子供の時に、誰が一番よくそばにいたか」という質問に対し、日本では、ほとんどの人が母親と答え、父親と答えた人は全くいなかった(図 43 参照)。母親は家事や子育てをする存在、父親は働く存在というイメージを表している。アメリカでは多くの人が母親と答えたが、母親も父親もと答えた人も多い(図 44 参照)。母親が家事や子育てをするというイメージは依然強いが、母親も父親も家にいるというイメージを持つ人も多い。

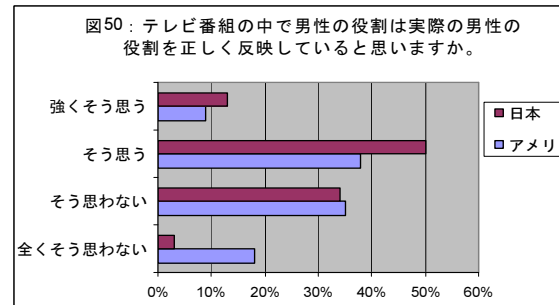
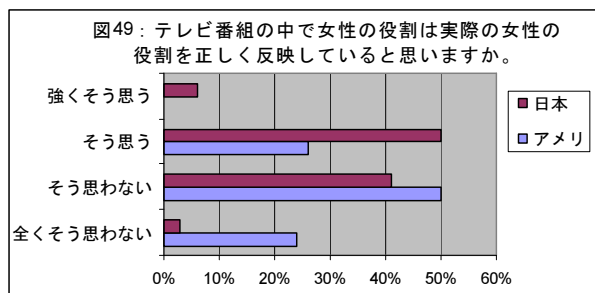


「おもちゃの影響力」については、日本では子供用の料理道具セットや人形と答えた女性が多かった。一方、多くの男性はビデオ・ゲームやスポーツ道具やアクションフィギュアと答えた(図45参照)。アメリカでは多くの男性はアクションフィギュア、女性は人形と答えたが、日本に比べ多くのおもちゃがより男女共通である。ブロックは男女共に使われる(図45, 46参照)。



「一般に、テレビコマーシャルの中でどんなことをしている女性の反映をよく見ますか」という質問に対し、日本ではキャリア・ウーマン、家事をする人、専業主婦と答えた人が多く、メディアは働く女性というイメージと共に伝統的な役割も同時に押しつけている。アメリカでは妻、専業主婦、家事をする人という答えが多く、伝統的な役

割のイメージが強く残っている(図 47 参照)。男性については日本ではほとんどがサラリーマンと働く父親と答えている、男性は財政的な面で家族の面倒を見るというイメージが強い。一方、アメリカでは答えが多様で家事をする人と専業主夫の父親というイメージだけではない(図 48 参照)。



「テレビ番組中の男性と女性の役割は実際の役割を正しく反映しているか」という質問に対し、賛成と反対は半数ずつであった(図 49, 50 参照)。

5.2 研究質問 2 の結果のまとめ

仕事は 日本もアメリカも男は仕事、しかし女性は、仕事をする人もいれば家事をする人もいれば両立している人もいる。テレビのコマーシャルも番組も男女の役割に強い影響を及ぼしているし、遊ぶおもちゃも影響をしている。日本で女性は子供用の料理セットで家事体験をする。また日本では父親が子供とあまり時間をすごさないことは父親が家事をしないという考えに影響しているのではないかと思う。

6. 結論と議論

日本では伝統的な役割は未だに期待されているが、反面男女の役割に対する平等化も進んでいる。アメリカでは伝統的な役割はそれほど存在せず、男女の役割間での平等が期待されている。メディアは期待された役割において強い影響力を持っている。テレビでの男女の役割の描写は現実と同じようであることが期待されている。日本では家事をする母親のイメージが強い。これは女性の伝統的な役割を反映している。日本では父親はあまり家にいないので子供が家庭における父親の役割を直接みることが少ない。

このことは男性が家事の手伝いをするべきという考え方との間に差異を生む。一方、アメリカでは男女が平等に仕事をし、家事もこなすため社会に平等の意識が植え付けられる。

7. 研究の限界

回答者が住んでいる地域や年歳に限りがあったため一般化することはできない。どうしてそう思ったかという理由については、一部たずねなかったため答えの理由がわからないものもあった。

8. 将来の研究

日本での子育てについては男女の役割が少しあいまいなため、もっと研究が必要だと思う。また、男女の役割に対する影響力についてもっと調査することも必要である。インターネットや映画や教育面などの関係性についてももっと探っていきたいと思う。日本では「子供の時に、誰が一番よくそばにいましたか」という質問に対して、父親と答えた人は全くいなかったのに、男性の中には家事労働を肯定的に考えている人もいた。父親像への期待と現実の相互関係についてさらに調べたいと思う。また、大学卒業後、男女の役割の認識がどのように変化するのかについても調べたいと思う。

参考文献

- Arima, A. (2003). Gender stereotypes in Japanese television advertisements. *Sex Roles*, 49(1), 81-90.
- Hendry, J. (2003). *Understanding Japanese Society*. New York, NY: Routledge.
- Lindsey, L., & Christy, S. (1997). *Gender Roles : A Sociological Perspective*. Upper Saddle River, NJ: Prentice Hall.
- Levey, T. (2006). Gender and value orientations: What's the difference!? the case of Japan and the United States. *Sociological Forum*, 21(4), 659-691.
- Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology – Japan.

- (2012). *Statistics: Overview*. Retrieved March 9, 2014, from <http://www.mext.go.jp/english/statistics/index.htm>.
- Parker, K. & Wang, W. (2013). "Modern Parenthood." *PewResearch Social & Demographic Trends*. Retrieved April 10, 2014, from <http://www.pewsocialtrends.org>.
- Smith, S & Granados, A. Gender and the Media. *National PTA*. Retrieved April 10, 2014, from <http://www.pta.org/members/content.cfm?ItemNumber=2258>.
- Statistics Bureau, Ministry of Internal Affairs and Communications. (2006). 就学率及進学率. Retrieved April 18, 2014, from <http://www.stat.go.jp/index.htm>.
- Takamura, S. (2012). Economic Empowerment of Women in Japan. 4th *Global Forum on Gender Statistics*. United Nations Statistics Division Retrieved April 18, 2014, from <http://unstats.un.org/unsd/default.htm>.
- U.S. Census Bureau. (2012). *Educational Attainment of the Population 18 Years and Over, by Age, Sex, Race, and Hispanic Origin: 2013*. Retrieved March 9, 2014, from http://www.census.gov/compendia/statab/cats/education/higher_education_institutions_and_enrollment.html.
- Valaskivi, K. (2000) Being a Part of the Family? Genre, Gender and Production in a Japanese TV Drama. *Media, Culture & Science*, 2(3), 309-325.
- Witt, S. (1997). Parental influence on children's socialization to gender roles. *Adolescence*, 32(126), 253-359.
- 北村, 優子. Gender Equality Dilemma in Japanese Society: How Traditional Ideas Affect both Women and Men. *文教大学国際学部紀要*, 19(1), 65-78. Internet.